

イタリア建築の中世主義——交錯する過去と未来——

横手義洋（東京大学助教） 著 定価 一、五五〇円（本体 一、〇〇〇円＋税）

A5判上製函入 本文二九二頁 挿図一一八点 ISBN978-4-8055-0589-2

イタリア建築——まずは、あまりにも当たり前のように使われるこの呼称について考えてみたい。そもそも地中海の中央に突き出す長靴状の半島にイタリアという名称が与えられたのは遠くギリシア時代にまで遡る。だが、その名称は民族や地域を示していたとしても、まだ国家としてのまとまりではなかった。さらに中世に「イタリア侯爵領」あるいは「イタリア伯爵領」という呼称が存在したが、統一国家と呼ぶようなものではなかった。だが、イタリア半島にひとつの国家が誕生し、イタリアという地域的名称に共同体的アイデンティティが付加されるとき、共同体的アイデンティティこそが建築を考える際に大きな意味を持つことになる。それが、本書で重要な主題となる近代国家にふさわしい建築の模索である。この意味で言えば、イタリア半島の北東部を領土とするイタリア共和国、ついでイタリア王国が誕生した十九世紀初頭という時期はひとつの転機だったのかもしれないが、指導者ナポレオンの失脚とともに短命に終わった。サヴォイア家による近代国家イタリアの成立は一八六一年を待たなければならぬ。より正確に言うなら、その少し前から、リソルジメントと称される国家統一運動の渦中で、共同体的アイデンティティを体現するべく「イタリア建築」なる概念が登場している。そのなかで、建築家たちは国家の様式という名の下に「イタリア建築」探しをしなければならなくなったのである。（中略）

遅れて訪れた近代化は、イタリアの建築家たちに何をもちたらし、何を考えさせたのだろうか。通常、遅れた者は先んじた者を意識し、長所があればそれを取り入れようとする。しかし、取り入れる際、遅れた者にもさまざまな事情があった。一言に近代化の追従といっても、他国の流行がまったくそのままに受け入れられることはない。このことがもつとも顕著にうかがえるのは、技術よりは、文化、すなわちアイデンティティの問題においてであろう。試みに、ゴシック・リヴァイヴァルとイタリアの事情を考えてみる。たとえばイギリスには垂直性の強いゴシック建築の例が豊富にあり、この国でゴシック・リヴァイヴァルが起こってもなんら不思議はない。しかし、その流行が国境を越えたらどうなるか。フランス、ドイツにはゴシック建築が数多くあった。ところが、イタリアには垂直性の強い軽やかなゴシック建築が少ない。どちらかといえば重厚なロマネスク建築のほうが豊富である。イタリアでは、たとえゴシック・リヴァイヴァルに優れた価値を見出したとしても、やはりイタリアで通用するものに変えなければならぬのである。また、遅れたぶん、イギリスだけでなく、フランス、そしてドイツの事情も参照しなければならぬ立場に置かれる。遅れた近代国家においては、近隣各国の長所を自由に選び取り、それを自国内の論理に沿うように変化させるのである。ここには文化受容におけるきわめて合理的な思考過程を認めることができる。こうして、遅れて訪れた近代化への注目は、影響された側の史的可能性として浮上する。まったく、それは近代通史からこぼれ落ちる内容をクローズアップする作業に他ならない。（第一章より）

著者略歴

横手義洋（よこて・よしひろ）

1970年生まれ。1994年、東京大学工学部建築学科卒業。同大学院工学系研究科建築学専攻へ進学。1997～99年、イタリア政府給費留学生としてミラノ工科大学建築学部に留学。2001年、東京大学大学院にて博士号取得。2002年、東京大学大学院助手。2007年、同大学院助教。1996年、日本建築学会優秀修士論文賞。2004年、日本建築学会奨励賞。研究分野は、イタリアを中心とするヨーロッパ近代建築史。主な著作に、『図説 西洋建築史』（共著、彰国社）、『近代建築史』（共著、市ヶ谷出版）、『ピラネージ建築論 対話』（翻訳、アセテート）など。

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7読売中公ビル内
電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取扱いは

19世紀後半に展開した建築の「中世主義」を、ヨーロッパ全体の史的潮流からイタリア独自の近代的課題として浮き上がらせるとともに、その中心的イデオログであったカミッロ・ボイトの理論と実践を通して、イタリアの近代化過程が要請した伝統と革新の問題に迫った労作。

目次

第1章 イタリアにおける中世主義

第1節 研究の目的と意義

1. 「イタリア建築」の誕生/2. 研究上の課題/3. イタリア中世主義の特殊性

第2節 中世建築へのまなざし

1. 新古典主義時代のゴシック建築観/2. イタリア中世建築への注目/3. ピエトロ・セルヴァーティコ/4. カミッロ・ボイト

第3節 イデオログ—解釈の変遷

1. 追悼、そして戦前までの評価/2. 戦後—近代運動と中世主義者/3. 修復理論家/4. 多面的なボイト論へ

第2章 中世主義の理論—歴史から未来の構築へ

第1節 歴史的正当性の構築

1. 国家統一運動と建築様式/2. 「ロンバルディア建築」という神話/3. 統一イタリアの建築/4. 多様性と統一性

第2節 純粋性の希求

1. 折衷主義の台頭/2. 「ひとつの様式」/3. 反折衷主義理論/4. イタリア技師・建築家会議

第3節 近代的な表現をめざして

1. 合理性/2. 倫理性/3. 幾何学性/4. 歴史性

第3章 中世主義の実践—理論から現実の革新へ

第1節 中世主義の新建築

1. 一八五〇年代/ヴェネツィア/2. 一八六〇年代/ミラノ/3. 一八七〇～八〇年代/パドヴァ/4. 世紀末から二〇世紀へ

第2節 もうひとつの中世主義

1. 修復における様式の統一/2. 建築修復と「オルガニズモ」/3. フィレンツェ大聖堂のファサード/4. 理論と実践の掛橋

第3節 建築教育改革

1. 北イタリアにおける国家統一前の建築教育/2. 工学と美術の融合/3. 建築史教育の役割/4. 建築の理想/教育の理想

第4章 中世主義を超えて

第1節 近代都市計画と建築様式

1. ミラノ大聖堂広場整備計画/2. 都市と建築の乖離/3. 建築規制と建築様式/4. 都市保全の萌芽

第2節 加速する折衷主義

1. 歴史性と近代性の分裂/2. 修復と設計の分岐点/3. 工学教育と折衷主義/4. プルジョア社会の建築様式

第3節 建築修復理論の近代的基盤

1. 修復の省察/2. 保存へ/3. 歴史資料として/4. 新たな地平

終章 イタリア中世主義—革新の方法論

1. 新世紀へ/2. 統一イタリアの建築をめざして/3. 革新の方法論/4. 中世主義の成就するところ

図版出典一覧/あとがき

イタリア中世主義

近代国家イタリアの誕生と密接に関わる建築運動で、まさに新しい国家の建築という主題に回答するものであった。その影響力は、新建築創造の原理となったりヴァイヴァリズムと過去の建築に対する修復行為を横断するものとして確認することができる。国家の独立と統一へ向かう気運とともに、とりわけヴェネト、ロンバルディア地方において、古典主義的伝統を根本から刷新しようという運動が高まり、中世建築に芸術における革新や自由という価値が認められるようになった。

カミッロ・ボイト Camillo Boito

1836年ローマに生まれる。13歳で美術アカデミーに入り、1859年以降にミラノを拠点として活躍した。中世主義のイデオログとして、彼がその活動を通して模索したのは統一イタリアにふさわしい近代建築である。1914年6月28日、ミラノにおいて死去。



中央公論美術出版 関連書のご案内

建築史学の興隆

D・ワトキン 著 桐敷真次郎 訳

17世紀初頭から現代に至る建築＝美術史家の主要文献だけで450書を越す著作を、国別・年代別に位置付け、歴史的評価を施したもので、西洋建築史および関連する美術史の成立の全貌を把握するに不可欠の建築史自体を対象とした世界で初の試みである。訳書は新たな項目を追加した80頁を越す索引を付し、建築史文献辞典としての機能も備えた必備の書。

A5判上製函入 本文502頁 定価16,311円(税)

ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊

鈴木博之 著

19世紀後半、ヴィクトリアン・ゴシック末期の英国建築の状況を日本建築との関連性、当時の建築保存論、様式論の転換という三つの視点から明らかにする。コンドル、スコット、ラスキン等の建築論を通じ、体制と反体制、英国建築の精神風土、その特質の意味を問い、新しい局面を開拓した論文集。

B5判上製函入 本文450頁 定価26,250円(税)